

[生 活]

子どもの学びの質の変化を生み出すために

—やぎとのかかわりで成長する1年生—

有坂 一郎*

1 はじめに

初めて1年生を担当し、初めて生活科を実践したときのことである。アサガオの栽培とやぎの飼育活動、この2つの活動を柱にして生活科を進めていくことを、4月の学年会で確認した。この中で、私はとりわけやぎの飼育活動に関心をもった。なぜなら、私自身が子どもと一緒に動物を飼育することが初めてであったからだ。子どもと本気になって飼育活動することに、大きな期待を寄せていた。

そしてもう一つ、これはやぎを迎える前のことである。私は子どもたちにこう言った。「やぎさんが5月30日にやってきます。やぎさんが喜ぶことをしましょう。」この言葉の後、子どもは思い思いにやぎが喜ぶと思うことをやり始めた。その中で、私は次のことをしている子どもに疑問をもった。背の高い草をひたすら抜く子ども、大きなすのこ板を持ち上げてその下にいる虫を捕まえている子どもである。一見遊びとは区別のつかない活動に、一体何をやっているんだと思ってしまった。しかし胸の内は抑え、柔らかに尋ねてみた。

すると子どもはこう言ったのである。「やぎさんが歩くのに邪魔だから草を抜いているの。」「大きな板の下に虫がいるんだよ。やぎさんの足がかじられちゃったらかわいそうでしょ。だから虫をどけてるの。」

子どもは自分のしていることをちゃんと意味付けているのである。大人の一方的な見方・考え方からでは予想もできない思いが子どもにはあるのだ。私は子どもの学びの姿を記録しながら、子どもの姿から強く学びたいと考えた。

2 主題設定の理由

自分のしたいことをする、つまり自分中心の考え方だった子どもが、次第に周囲に目を向け始め、相手のことを考えるようになっていく。このような姿が見えた時、学びの質が変化したといえるのではないだろうか。さらに、相手のことを考えて活動しながら自分自身の問題となっていく。例えば、相手に感謝の気持ちをもつようになる、或いは自分の成長に対する気付きをもつようになる、といった姿が見えた時、学びの質がさらに変化したのだと考える。

子どもは自分のしたことを確実に意味付けている。しかも、大人の発想をはるかに超えた意味付けをしながら学んでいるのである。一人一人の違いを受け止め、認めることを基本としながら、どんな場面でどんな活動を設定していけば学びの質は変わるのか。そして、私たちは指導上、どのような構えをもてばよいのか。この点について、繰り返しになるが、子どもの具体的な姿から学びたいと考えた。

3 研究の目的

小学校1年生の子どもが主体的に学び続け、学びの質の変化が生まれる活動設定や教師の指導の構えについて明らかにする。

4 研究の方法

- (1) 繰り返し対象とかかわる体験活動と文章表現活動の一体化
- (2) 日常の活動、弾みを付ける活動、節目となる活動、振り返りの活動等の場の設定
- (3) 子どもの作文の継続的な記録（情報収集）

具体的には、子どもが体験したらすぐに書く活動を行うようにする。そして、子どもの書いた作文を記録しながら、本時の活動の意味付けをし、次時以降の活動設定について考えていく。また、一人一人の作文を継続的に記録してい

* 上越市立高志小学校

くことで、子ども自身の言葉から変容を読み取っていく。これら一連の流れを通して、子どもの学びの質の変化について考察する。

5 子どもの変容

以下に記すA児は、決して突出した子どもではない。しっかり者であるとか、感性がとりわけ豊かであるとか、そういった印象はない。実際、他の子どもと比べて、なかなか学びの質の変化が見られなかった。以下にA児の作文を記していく。なお、長期にわたる記録であるので、変容が見られたと思われる時期ごとに整理する。

(1) やぎにしたいことをする

5月30日

いよいよちいちゃんたちが来ました。でも1年2組の人が追いかけていました。

6月1日

今日はやぎ小屋に行って、草をあげました。

「書くことない」と言ったので、「したことを書いてごらん」と投げかける。

6月8日

今日は1時間目にやぎ小屋に行って、アイとみんながお散歩に行きました。

自分のしたことは書かれていない。「もう書かない」と言う。

6月13日

みんなでお散歩に連れて行きました。

【別の子どもの作文】

「ちいちゃんの散歩を先にしました。それから小屋にはだれもいないので、かわりにBさんとCさんと私で掃除をしました。三人じゃ大変でした。そのとき散歩はDさんとEちゃんがしていました。小屋は汚くてうんちもそこらじゅうにあって、うんちばさみもみんなが使っていて、ほうきで取りました。大変でした。でもがんばりました。」

Aとは対照的に、自分のしたことや、友達と一緒に活動したことを書いている。一部の子どもの作文には友達の名前が出始めていた。

6月16日

やぎ乳を飲んだら普通の味でした。でもおいしかったです。やっぱりアイの乳が一番です。

前日に乳搾りをし、この日に全員で味わうことにした。みんなで思いを共有することが、今後の活動に弾みをつけると期待した。

6月24日

今日、みんなでえさを集めました。みんなですごくいっぱい集めました。チー、ボボ、アイ3びきの大ごはんができました。

この日は、餌となる草をみんなで刈りに行った。何人かの子どもは、「食べてくれてうれしかった」という満足感、「おなか減ったよ、早くくれー」というやぎの声などを作文に書いていた。

クローバーが好きだと気付いた子どもは一生懸命クローバーだけを取っている姿も見られた。

6月27日

雨降ってやぎさんのところへ行って、やぎ小屋に行きました。

【別の子どもの作文】

「今日、初めて雨の日にやぎ小屋に行きました。今日、初めてボボ、チー、アイが泣いていました。ボボ、チー、アイが寒いって聞こえました。だから、今日はたまった水をちりとりで取りました。」

この日は朝から雨が降っていた。生活科で学習するにあたって初めての雨の日である。「やぎさんがぬれていてかわいそうだった」「やぎさんが泣いていた」「やぎさんが涙を流していた」などの作文が目立った。よく観察したり、気付きをもったりする子どもが出始めた。Aには、まだ見られない。

7月6日

今日、やぎ小屋に行って散歩させました。最初にチーを次にボボを、その次にアイを散歩しました。

【別の子どもの作文】

「今日、初めてボボを抱っこして、ボボは「気持ちいいよ」って言ってました。あと、アイがものすごい勢いで走ったから、転びそうになったです。…あと草集めた人、ありがとうございます。」

この頃になると、学級の半数くらいの子どもは、やぎに対する思いがさらに膨らみ始めていた。ここ数日は「みんなで～する」といった活動が多かったからだろうか。この日の作文には「チーを散歩させたのは初めてだったので緊張しました。」「初めて抱っこできてうれしかったよ。」など、「初めて～しました。」という記述が見られた。作文の量も全体的に増えてきていると感じた。Aにはまだ、明確な変化は見られないと感じた。

(2) やぎに思いを寄せ始めるようになる

9月2日

①チーの耳くそがたまっている。②チーの鳴き声がめーだったのが、め～になった。③チーが咳をしていた。

2学期になり最初の生活科である。長い休みを終えて「やぎさんが変わったと思うところを見つけましょう」と投げかけた。

9月5日

赤ちゃんの名前はミーがいいと思います。アイに似てて、とってもかわいかったです。

前日に赤ちゃんやぎが誕生し、この日は見たり触ったりした。ところで、2日、5日のAの作文には、1学期とは違った記述が読み取れる。「鳴き声がめーだったのが、め～」「アイと似てて」という記述から、よく観察していることが分かる。目や耳だけではなく、感性も働かせているかのような記述である。

9月7日

今日、チーを散歩させました。最初、FくんとGくんとHくんで散歩してたら、約束の時間になってしまいました。でも、チーはいうことを聞きませんでした。その時、IちゃんとJちゃんとKくんが来て、やっとやぎ小屋へ帰れました。

1学期後半に学級で多く見られた「友達の名前が作文に出てくる」といった姿が、Aに見られ始めた。

9月20日

今日、重さを量ってびっくりさせてごめんね。前、2.3キロだったのに、5.9キロになってたからびっくりしました。

9月22日

9月30日はやぎさんの誕生日会です。ぼくはメダルをあげたいです。

【別の子どもの作文】

「9月30日はやぎさんの誕生日会です。あい、ちい、ぼぼちゃんには、おいしい草をあげたいです。大好きな草はくずです。くずは電信柱にまきついてどんどんまきつく植物です。やぎさんは大好きだそうです。ゆきちゃんには声を聞いて、抱っこをしたり遊んであげて喜んでもらいたいです。お誕生日おめでとう。」

赤ちゃんやぎの誕生を契機に、毎月誕生会を実施することに決めた。やぎの誕生会は弾みを付ける活動であると共に、毎月行うことで節目となる活動にもなる。Aは、やぎが学校に来たとき、友達がメダルのプレゼントをしていたことを思い出したようだ。多くの子どもは「草をあげる、大好きなくずの葉を取ってくる」と書いていた。しかし、Aは草を集めたり、それを喜んで食べるやぎの姿を見たりした経験に乏しい。

9月28日

チーを散歩させました。でも、やっぱりと思って、どんぐり拾いと草集めをしました。

この日は、一人一人が考えた「誕生日のお祝いメニュー」をプリントにまとめ配布した。友達の考えを知ることにより、活動内容が広がることを期待した。実際、Aは散歩だけでなく、どんぐり拾いや草集めをしている。今までにはなかったことだ。

10月6日

10月4日にやぎさんの誕生日会をしました。そしてぼくはメダルをあげました。

【別の子どもの作文】

「初めにユキちゃんにメダルを一つあげました。ユキちゃんはありがとうって言ってとっても喜んでいました。チーとポポにもあげました。ユキちゃんと同じでありがとうって飛び跳ねてとっても喜んでました。アイには長い紐がなくて作れませんでした。そのかわりアイには草をたくさんあげました。私はチーとポポをタオルでみがいてあげました。そうしたら喜んでいました。」

多くの子どもは、「喜んでくれてうれしい」「ありがとうって言ってた」と作文に書いている。しかしAの作文にはこのような言葉は書かれていなかった。

10月19日

文化祭のワークショップはもう少しでした。やぎさんクッキーを包んだり、型を抜いたりしました。とっても楽しかったです。でもやっぱりちょっとよくできなかった。

文化祭ワークショップの振り返り作文である。誕生会といい、ワークショップといい、Aは満足感を味わっていないことが分かる。

この時期のAの作文を読んでいくと、ゆっくりとではあるが、やぎに対して少しずつ思いを寄せ始めている。今まで何となく散歩することしかしていなかったAが、9月28日はやぎのためにどんぐりと草を集めたのである。「やっぱりと思って…」の言葉の意味はAにしか分からないことではあるが、Aは自分で決めて餌集めをしたのである。

Aの学びを見取り、成長することを信じ、待つという姿勢が、Aのこの姿を導き出したのではないかと考える。しかし、この時期のAは、やぎから肯定的な声をほとんど聞いてもいないし、自分のしたことに満足してもしない。2学期に入り少しずつ変化が見られ始めたものの、ここは後押しが必要であると感じた。

(3) やぎとの心の交流が始まる

11月1日

今度の誕生会で、ぼくは小屋のお掃除をしたいです。アイとチーとポポとユキちゃんをなでようと思います。

9月22日とは違った内容になっている。実は10月後半の日曜日のやぎ当番で、Aは私からたくさん褒められたのだ。その日は6人の当番のうち、Aともう一人の子どもしか来なかった。二人の子どもは一生懸命小屋の掃除をした。私はAにありがとうと言い、やぎさんも喜んでいて、声を聞いてごらんと投げかけた。そして翌日、学級でAのがんばりを紹介したのである。

担任から褒められ、おそらくやぎからも感謝の言葉をもらい、Aはうれしかったに違いない。Aにとってみれば、このことが弾みをつける活動になったのかもしれない。今回の作文から前向きさが伝わってくるような気がした。

11月16日

最初わらを敷こうと思ったらしくんが掃除をしてからの方がいいよと言ってぼくも掃除をしてからわらを敷きました。最後にやぎさんの声を聞いたら寒いよって言っていました。今度はすごくあったかくしてあげるからねって言ったたらありがとうと聞こえました。とっても楽しかったです。それとアイ、チー、ポポ、ユキがすごく大きくなったと思いました。

正直驚いた。まず長く書いていることに驚いた。そして友達の名前が出てくるだけではなく、やぎと会話する心の交流が見られたのだ。よく観察もしている。

11月21日

冬は越せないと思いました。でももっともっと遊びたいから冬になってもちょっとでもいいからいてほしいです。やぎさんは「夜すごーく寒い」ぼくが「どうすればいい」と言ったら「分からないよ」って言ってぼくが「今度何とかしてあげるね」って言ったら「本当に、ありがとう」その後、ぼくはやぎさんのことが不安になりました。

やぎが学校で冬を越せるかどうかについて、よく考えている。寒さを何とかしたいと考え始めたAは、その後、別れの日まで、わらを敷いたり小屋の泥水をすくったりする活動に取り組んでいた。何をしていたか迷っている姿はもう見られなくなっていた。

12月8日

トラックが発車してぼくも走りました。そのときやぎさんが「がんばって我慢して泣かないよ」ぼくも「じゃあ泣かないよ」と言いました。そしたら「ありがとう」と言ってくれました。だから「泣かないぞ」と思いました。でもその後、やっぱりちょっと悲しかったです。

この日の作文には、別れの日の様子が本当に詳しく書かれていた。初めて作文シート3枚まで書いた。「書くことない」「もう書かない」と言っていた6月のことを忘れてしまいそうなくらいの勢いがあつた。

やぎとかかわり始めてから5か月が過ぎ、この時期になってようやくAにも、大きな変化が見られるようになった。繰り返す対象とかかわり、同じような活動を続け、今の自分を作文に残していく。ちょっとした教師の後押しがあったものの、Aは自ら成長していったのである。

Aはやぎとかかわりながら、自分の思いをためていたのだ。そして自分自身で試行錯誤し、満足したり納得したりしたからこそ、学びの質に変化が生まれたのである。

(4) 自分の成長に気付くようになる

やぎとの直接的なかわりが終わった。しかしこれで学びは終わるのではない。まだ続くのである。やぎとお別れして悲しい、寂しいでは生活科の目標に到達しないだろう。私はその中でも「自分自身や自分の生活について考えること」とりわけ「自分の心身の成長に気付くこと」を重視したいと考えた。

そこで、以下のような体験活動や文章表現活動を仕掛け、子ども自身が振り返るような活動を設定し、学びの質の変化が生まれることを期待した。引き続きA児の作文を記す。

12月14日「やぎがくれたもの」

やぎさんがくれたものは、思い出、気持ち、やぎさんのいたときのこと、チーと初めてお話したこと。だから寂しくないです。

この日は、みんなでやぎを牧場に返すかどうかを話し合ったことを想起させた。そして今の気持ちを発表させ、「忘れられない贈り物」(作：スーザン・バーレイ)の読み聞かせを行ってから、作文に取り組むようにした。

12月22日「やぎへ」

寒くないですか？風邪ひいていませんか？雪がいっぱいですか？元気ですか？ぼくは元気です。ぼくたちの方はもう寒いです。

2学期終業式の日、節目の活動としてやぎへの手紙作文を書いた。

1月11日「やぎの〇〇へ」

チーへ。元気ですか。雪がいっぱい降っていませんか。風邪をひいていませんか。草をちゃんと食べていますか。みんな元気ですか。凍っていませんか。雪に埋もれていませんか。

3学期になり、やぎとの活動が思い出に変わりつつある時期である。正にこの時期に、子どもの実態を見ながら、振り返りの場を設定していくことを心がけた。この日は別れの日のビデオを見せて、その瞬間を想起させてから手紙作文を書くようにした。相手意識を明確にするために、4頭のやぎの中から手紙を書きたいやぎを選んで書くようにした。

2月24日「できるようになったこと」

- ①初めて動物を飼ったこと。②アサガオを植えたこと。③給食を食べれたこと。④初めて連絡帳を書けたこと。
⑤初めて友達ができるようになったこと。⑥初めてひらがなを書けたこと。⑦初めてカタカナを書けたこと。
⑧初めて漢字を書けたこと。だから、スーパー1年生になりました。

1学期、2学期と学期の節目に行ってきた「できるようになったこと」の作文を書いた。Aの作文を見ると、自分の成長を感じていることが分かる。そして何より驚いたことが、一番初めに書いたできるようになったことが、動物を飼ったこと、つまりやぎのことなのである。結びの文章が力強い。

3月16日「あい、ちい、ぼぼ、ゆきへ」

あい、ちい、ぼぼ、ゆきに一番言いたいことは、「ありがとう」です。どうしてかということ、楽しかったからです。ぼくは最初の頃、やぎさんをさわってあげられなかったけど、どんどんさわれるようになってきました。だからぼくはやぎさんのことが大好きです。それとぼくはやぎさんのことがかわいいと思います。

この手紙作文を書いた前日、1年生はみんなで、里帰りしたやぎに会いに行った。3か月ぶりのやぎの成長に驚くと共に、再会をととても喜んでいた。Aの作文には、やぎに対する感謝の言葉が書かれている。そして以前の自分を思い起こし、次第に成長していった自分に気付いている。

6 研究の成果

Aをはじめとして、学級の子どもの6割が3月16日の作文に「感謝の言葉」や「自分自身への気付き」を書いた。

【3月16日の作文】

「ぼくはありがとうと言いたいです。どうしてかということ、思い出をくれたからです。ぼくは転校するけど、友達の思い出、やぎさんの思い出、命のあさがおさんの思い出、はじめてシートが書けたことの思い出は、絶対に忘れません。来年の1年生もあい、ちい、ぼぼ、ゆき、そのどれかのやぎさんを飼ってほしいです。」

「今まで一緒に活動してくれてありがとう。どうしてかということ、アイ、チー、ポポ、ユキとの活動がとっても楽しかった日もあれば、うれしかったときもいろいろな日があって、とても楽しかったからです。わたしが悲しいとき、やぎさんがなぐさめてくれたから、ここまでこれたのです。やぎさんがいなければ、私は一生、弱い子どもでした。私はやぎさんと出会えてうれしかったです。また会いたいと思っています。会えるといいです。」

では、本研究で、明らかになったことを簡潔にまとめる。

(1) 繰り返しのかわり、自己決定の連続が子どもの学びの質を変える。

同じような活動を繰り返し、じっくりと取り組める時間ややり直せる機会を保障する。そして、対象の声を聞くよう働きかける。これらのことは、すべて子どもの自己決定へとつながるものである。

私はできる限り、活動内容を限定してしまう言葉がけはしないよう努めた。例えば「餌集めをしましょう。」とは投げかけず、それよりも「喜ぶことをしましょう。」と投げかけた。すると、子どもは思い思いに自分で決めた活動に取り組んだ。そして、同じような活動を繰り返すうちに、子どもはどんどん自分らしい見方や気付きをためていき、対象に寄り添った活動や季節の変化に合わせた活動をするようになっていった。

また、対象の声を聞くことは、自らの内なる声を聞くことである。ここにも自己決定の作用が働いている。最初は「聞こえない。」と言っていた子どもも必ず聞こえるようになる。「草が食べたい。」「散歩がしたい。」最初は自分のしたいことが声となって表れるが、繰り返しのかわり、自己決定の連続によって、子どもは変容していく。聞こえる声の質も変わっていくのである。だから次第に、子どもは対象のことを考えた活動をしたり、対象のしたいことに合わせて活動を決めたりするようになっていった。

(2) 作文を書きため、振り返り自己を見つめ意味付けることが子どもの学びの質を変える。

体験した後は、必ず作文を書くようにした。今の自分を残すためである。子どもは書くことで自分に向き合い、主観を大切にしながら、自己実現を図ろうとしていった。そして、書きためた作文を整理し、振り返る機会を設定することによって、子どもはこれまでの学びを見つめ、自分でつなげたり意味付けたりしていった。

(3) 子どもの姿を記録し続け、その子の今を信じ待つことが子どもの学びの質を変える。

子ども一人一人の学びの姿を、主に作文シートをもとに記録してきた。毎回というわけにはいかなかったが、できるかぎり記録し、その子の今を見つめてきた。これまで紹介してきたように、どんどん学びの質が変化していく子どもがいる一方で、Aのようにゆっくりと変化していく子どもがいることも明らかになった。

もし、私が画一的な指導をし、一人一人の子どもを「ここまでは引き上げねばならない」と強く意識していたらどうなっていたらう。おそらく、一人一人のよさは見えるはずもなく、子ども自らが学び成長していくチャンスを奪っていったに違いない。子どもの姿や作文を丁寧に見取りながら、全体或いは個に対して仕掛けたり、時には待ったりすること、この教師の指導の構えこそが、子どもの学びの質を変える原動力なのではないだろうか。

7 おわりに

生活科の実践は、私にとって大変魅力的なものであった。時には自分の取組を疑いそうになったこともあったし、反省ばかりが続く日もあった。しかし、決して苦しくはなかった。なぜなら、実践を重ねれば重ねるほど、子どもたちがどんどん変わっていったからである。

しかし、課題はある。教師のすべきことをよく吟味しなければならないということである。この活動設定でよいのか、今は仕掛けるのかそれとも待つのか、1年間の実践を通して本当に強く実感した。私たち教師は、絶えず日々の授業実践について、自問自答しなければならない。

最後に、私は生活科の実践を通して、子どもを理解しようとする気持ちが強くなった。これは自信をもって言える。子どもに感謝したい。

参考文献

- 木村吉彦 『生活科の新生を求めて』 日本文教出版 2003年
 文部科学省 「初等教育資料 平成17年10月号」 2005年
 文部科学省 「初等教育資料 平成18年1月号」 2006年
 上越市立高志小学校 『超研究開発 脱ピラミッド』 2002年
 上越市立高志小学校 『超研究開発 天使のサイクル』 2003年